

演題 28. 乳腺穿刺吸引細胞診で診断が困難であった 2 症例

○時田和也 神津多美 福岡貢 佐藤正 (JFE 健康保険組合川鉄千葉病院)

(はじめに)

乳腺吸引細胞診の診断精度と有効性は周知の通りである。しかし時に種々の要因で、良悪の鑑別が困難な症例を経験する。今回我々は乳腺穿刺吸引細胞診と組織診で良悪の判定が合致しなかった 2 症例について報告する。

(症例 1) 38 歳女性。妊娠中。左乳房腫瘤を触知にて、当院外科を受診。US にて左乳房 AC 領域に 20×15×12mm の類円形腫瘤を認め、乳腺吸引細胞診を施行した。細胞所見：多数の上皮成分の大集団を認め、その中に小乳頭状様構造が密になって存在していた。背景には、核小体の目立つ核が裸核様に散在し、結合性に乏しいことが示唆された。以上の所見より悪性を疑った。組織所見：明らかな悪性所見はなく、管状構造を示す明るい胞体を有する乳腺の細胞を認めた。妊娠、授乳期の乳腺組織像であった。

(症例 2) 59 歳女性。53 歳閉経。左乳房腫瘤の触知にて、当院外科を受診。US にて左乳房 AE 領域に 13×13×9mm の円形腫瘤を認め、乳腺吸引細胞診を施行した。細胞所見：多数の異型の弱いアポクリン化生細胞を平面的配列で標本一面に認めた。細胞境界は明瞭で、N/C は小さく悪性を疑う所見は認めなかった。組織所見：極少数の乳管癌が多数のアポクリン化生を伴って認められる組織像であった。明らかな浸潤像はなく、アポクリン化生を伴う非浸潤性乳管癌であった。

(まとめ)

細胞診と組織診の不一致症例を認めたさいには必ず細胞像と組織像を比較し、細胞診断の精度向上に努めることが重要であることが再認識された。

043-261-5111 (内線 2360)